

イスラエル・パレスチナ少年柔道チーム招聘に参加して

東海大学

体育学部/スポーツ・レジャーマネジメント学科

笠上 夢果

今回の、イスラエル・パレスチナ少年柔道チーム招聘事業に参加させて頂くことになり、「イスラエル・パレスチナ」という名を聞いた瞬間に、一瞬身構えてしまったのが始まりでした。この両国からくるイメージといえば、宗教問題、紛争、テロ、パレスチナ難民、ユダヤ人、迫害の歴史…等々、であり、自分はどう接すればいいのだろうか…??という少し複雑な気持ちが正直ありました。しかし、同時に間違いなく勉強になる、こんなチャンスは二度とないかもしれない、という思いが強く沸き上がっていました。何事も、実際に会い、話し、接してみなければわからない、「百聞は一見にしかず」という思いで両チームに会う日を待っていました。

その後、約 10 日間、彼らと共に過ごす中で本当に多くの事を感じ、学ぶことができ、刺激のある充実した日々となりました。毎日、毎日感じる事は異なり、書き出せば切りがない程たくさんの事を得ることができました。その中でも印象に残ったことをいくつか書きたいと思います。

まず一つ目は、「言葉/言語(英語)」の大切さです。社会において「英語は重要だ」とは常々言われ続けていますが、私の場合、毎日の生活で英語を使う機会は決して多くはなく、外国の友人とメールやチャットのやり取りをする際に使う程度であり、英語の重要性を強く感じる事が多くないのが現状でした。しかし、両チームの選手やコーチ・団長さんと英語で話すことになり、英語の重要性を改めて実感することになりました。通訳の方がいる時は何の問題もなく事が伝えられ、スムーズに進みますが、いつでも、どこでも通訳さんがいるわけではありません。自分で伝えなければいけない状況が多々ありました。留学経験があり、幸いにも日常会話程度の英語は話すことができたので、なんとか自力で伝えることができました。しかし、もし英語がまったくわからなかったら…と想像すると、何もできずに立ち尽くしてしまう姿しか浮かびません。確かに英語は、事務的な内容等を伝える際においても大切だと思います。ですが、今回イスラエル・パレスチナの皆と接していて私が感じたのは、英語がわからなければ相手の考えている事や気持ちもわからず、仲を深めることも難しいということです。初めの頃は挨拶しかできずにいましたが、身体の調子や気分はどうかと聞いているうちに、次第に会話が発展して行き、

彼らとの距離が縮まっていくのを実感しました。英語がわからなければ、会話を通して彼らとの仲を深めることは難しかったと思います。

イスラエルの団長のさん、光本さんとお話していた時に「英語は完璧でなくていい」と、光本さんがおっしゃっていたのを聞き、勇気を頂きました。完璧でなくても、まず伝えること、何とかして伝えようとする努力、その姿勢が大切なのだと感じました。今回のプロジェクトを通して、言葉がなぜ大切なのかという、自分なりの考えを持つ事ができました。

二つ目は、「物の見方と視野を広くもつ」ということです。イスラエルとパレスチナには宗教、紛争、テロなどといった様々な問題があり、とても簡単には説明も解決もできない事が多々あります。正直、私の中で、中東・イスラエル＝危険な地域、パレスチナ＝難民生活を強いられている、というイメージでした。日本に入ってくるニュースはテロ関連ばかりで、現地の人々の生活のことは一切知りませんでした。でも、イスラエルのコーチや通訳さんからお話を聞いていて、このイメージを覆されることになりました。お二人と話をしている、いかに自分が偏った見方しかしていなかったかを感じさせられました。自分の物の見方の問題に気付いたのと同時に、まだまだ、「知ろうとする」「視野を広げる」ということができていない自分にも気付きました。日本をはじめ、世界で何が起っているのか、知りきれない程のことが起っていると思います。ですが、「知らない」まま放っておくのではなく、自ら動いて知っていく努力をしていきたいと強く思いました。また、知る事で物の見方も変わってくると思います。視野を広げ、多くの事を知ることで、自分はどう感じるのか、どう考えるのかといった自分の意見をきちんと持ちたいと思います。

三つ目は「柔道の“道”という考え方」についてです。私にとって柔道は、高校の授業で少しやった程度で、全てにおいて初心者です。正直、技や組み手のことはわかりません。しかし、山下先生の講演で「柔道の道とは、柔道で学んだことを日常生活に、自分の人生に生かす、ということである。例えば、挨拶。畳の上だけ、柔道場だけで終わるのではなく、日常生活においてもしっかり挨拶ができること」というお話を聞きました。私は柔道をしていませんが、この考え方は柔道に限らず、全てに当てはまると感じました。今回のプロジェクトのような特別な時だけでなく、毎日の生活の中で色々な事を感じ学んでいます。それをその場限りのものとしてしまうのではなく、その後の生活の中で意識する、活かすということと同じだと思います。活かされ、一つ一つがつながることで道となり、それが自分をつくっていくということではないか、と感じました。将来、10年、20年経った時、すべてがつながっ

ていると実感できるよう、今を活かしていきたいと思います。

今回の招聘プロジェクトでは、文章にしきれない程、本当に多くのことを感じ学ぶことができました。間違いなく、私の大学生活の中で最も刺激のある、素晴らしい日々になります。イスラエル・パレスチナ両チームの選手やコーチ、団長さんから本当にたくさんの「ありがとう」と、とても温かい言葉を頂きましたが、それ以上に、「ありがとう」という気持ちでいっぱいです。またいつか、必ず彼らに会えることを願っています。

最後になりましたが、学生のうちにこのような素晴らしい機会を与えてくださった、NPO 柔道ソリダリティの光本さん、小沢さん、そして山下先生に心から感謝しています。本当にありがとうございました。



